

説明会は、運転再開に向けた「儀式」か？

- ◎ 3月10日、保安院は、昨年8月末の東電ひび割れ隠し事件発覚後、健全性評価委員会を設け、7回の会議を経て「中間とりまとめ」を発表しました。
- ◎ 説明会はキズだらけ原発を、検査もせずに運転再開を強行するための儀式です。

ひび割れは深刻、健全性評価委員会は重大な3点を指摘した！

1. ひび割れの原因は不明 ⇒ これから研究して原因解明する
2. 現在の検査頻度は10年で25%、40年で100%
⇒ ひび割れ多発を踏まえ、5年で溶接線の100%を検査すること
3. 超音波探傷検査ひびの長さも深さも信頼できない
⇒ これから検査精度の向上を図ること

- 原発の維持管理は、ひび割れの実態が検査で正確に把握でき、そのひび割れが正しく評価され、原因が究明されて初めて、対策は可能です。問題箇所の検査もせず、点検終了とは言えません。正確にひび割れを把握する検査方法がない中で、検査は出来ません。
- 1号機は運転開始から18年目、最新の7号機も6年目です。圧力バウンダリ配管の全溶接線の検査が必要です。
- ※ 圧力バウンダリ：原子炉内と同様の高温・高圧となる重要部分（裏の図を参照）。

全溶接線を、信頼できる検査方法を確立してから検査すべきです

- 原子力安全・保安院は、安全確保を使命とする組織で、「強い使命感」「科学的・合理的な判断」「業務執行の透明性」「中立性・公正性」の四つを行動規範としています（保安院HPより）。
それならば、東電に疑惑箇所の徹底点検を指示すべきです。

不正を許したのは保安院、ひび割れ隠しを続けたのは東電です

- 内部告発を2年間も放置し、告発内容の解明もせず、告発者を東電にすぐに通知したのは保安院（前身）です。ひび割れの発生原因が不明で、検査精度も信頼できずに「ひび割れは5年放置しても安全」と宣言する保安院は信用できません。
- 佐藤一男氏も近藤駿介氏も、溶接焼鈍記録の改ざんねつ造事件や、JCO臨界事件で「問題ない」と主張し、「プルサーマルは安全だ」と説明した張本人です。（※ この欄に実名記載の3氏は今回の説明会の国側参加者です）
中村浩美氏は、柏崎で国のプルサーマル推進説明会の司会を務めた人です。
- 福島県知事は「保安院と東電は同じ穴の貉だ」と言いました。全く同感です。

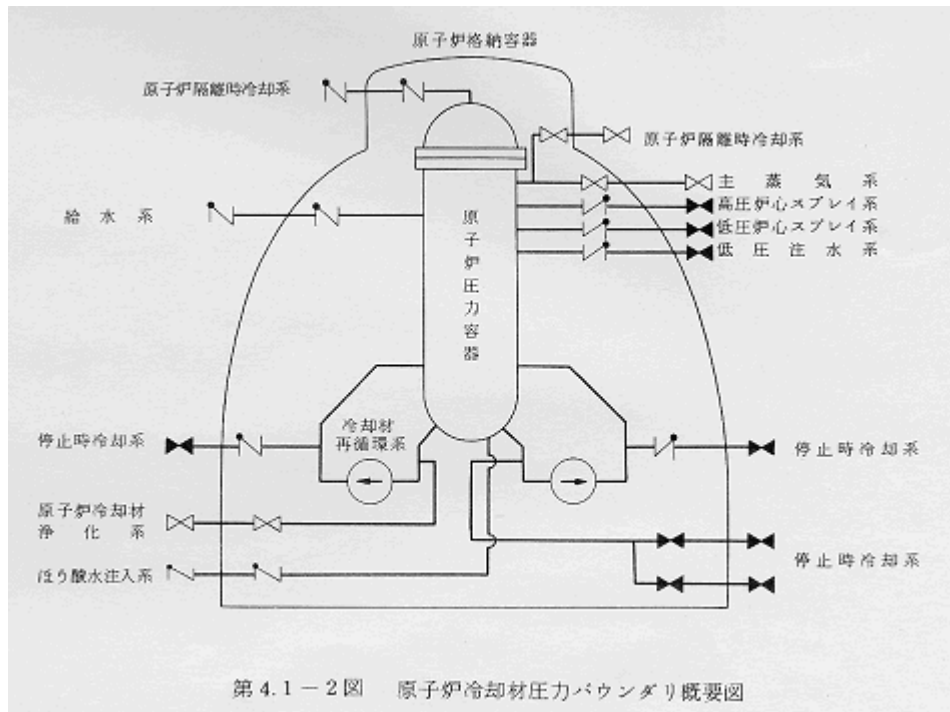
東電は徹底検査を計画していません！

- 1号機の再循環配管の溶接線は72箇所です。42箇所を調査して24箇所（約57%）がひび割れしていました。その後3箇所を追加調査し2箇所（約67%）が割れていました。まだ27箇所が残っています。東電は全部の溶接線を調べず、点検終了と発表しました。
- 1月24日、東電は、6号機の点検計画を発表しました。その計画に圧力バウンダリ配管や原子炉と接続するノズルの点検がありません。

ひび割れの徹底検査をしない国や東電は信用できません

	国（健全性評価委員会）・電力会社	私たちの要求
ひび割れ原因	<ul style="list-style-type: none"> 材料を過信して溶接後の熱処理工程を手抜き なぜひび割れするのか今後研究する ⇒ 02.12 原子力学会材料部会が検討会発足 	<ul style="list-style-type: none"> 柏崎刈羽原発は全号機が5年以上経過
検査間隔	<ul style="list-style-type: none"> 再循環配管の検査頻度は少なく問題がある 10年間に25%検査を ⇒ 5年で100%検査とする ⇒ 03.3.10 保安院中間取りまとめ p.47 	<ul style="list-style-type: none"> 圧力バウンダリ配管とノズルの全溶接線を、誰もが信頼できる検査方法を確立してから、熟練検査員が検査して健全性を確認すること
検査精度	<ul style="list-style-type: none"> 超音波探傷検査(UT)の精度は信頼できない UTで2.0mmが実際に削って測定すると12.2mm(約6倍!) ⇒ 測定不可能が実測 9.0mm等・長さも深さも信頼できない 	<ul style="list-style-type: none"> それまでは、保安院は東電に休炉を指示すべき(無用な点検・検査は被曝労働を強いるだけ)

<柏崎刈羽1～5号の圧力バウンダリ(3・4号安全審査申請書)>



<柏崎刈羽6・7号の圧力バウンダリ(6・7号安全審査申請書)>

